

社会

テレビ画面から伝わるもの

かつて、テレビが普及し始めた頃、辛口で知られた大宅壮一という評論家が、「これを見続けると日本人は皆、阿呆になってしまおう」と云ったことがある。これは主体的に考えることが退化してしまうので、「マス・メディアに流されるな」という警鐘だったのではないかと思う。今日では「一億総白痴化」も死語となり、禁句にさえなっている。現在では、テレビは携帯電話やインターネットと共に生活の中で欠かせないものになった。臨場感、真実性、視聴者の判断材料などは他のメディアを引き離している。画面も高画質となり色彩も自然色に限りなく近いものとなった。かつて街頭テレビに人々が群がった白黒の画面とは、隔世の感がある。

しかし、これを毎日観ていると食事の有難さを忘れるように、瞠目どうもくするほどの画面で無い限り、感動も感激も希薄になってくる。テレビゲーム時代に生まれ育った子どもたちは、これを不思議と思うこともなく、アニメの画面に吸い寄せられている。ここでアニメの功罪を論じるつもりはないが、このとき子どもたちは、テレビの仕組みや意図、技術、映像視点を空白にして、笑いと驚きに浸っていることは確かである。これは大人の行動にも見られる。

テレビの情報は視覚として自動的に流れてくる。推理も想像も必要としない。便利がここまできると生活に余裕が出来たかといえ、人々は情報に振り回され、返って落ち着きのない生活を送っている。私はテレビ画面とは、基本的に、作為の産物であり、集約的価値の伝達手段だと考えている。これはドラマ、ドキュメント、人物の登場しない風景の場面然り^{しか}である。ニュース内容さえこの責めからは逃れることは出来ない。つまり、視聴者は一方的に送られてくる、ある範囲で括^くられた情報を観ているに過ぎないのである。

ある識者が「人間は誰一人として自分の本当の顔を見た人はいない」と云ったが、鏡に映った顔は虚像だからである。テレビの画面はこれにもまさり、映像には製作者の主観が混在している。例えば、ドキュメントにしてもカメラは我々が見る何十倍もの映像を録画しているはずである。それを六十分か、長くても九十分に編集するのだから、実録の大部分はお蔵入りになる。さらに、名場面の再放送は支持できても、公共放送が番組の予告編をくどいほどに流すのは如何なものかと考え込んでしまう。好奇心旺盛な青少年、無垢な子どもにもこのシャワーは浴びせられる。しかも、若者が惹かれる番組は深夜に組まれているのである。

今や、テレビも一人に一台の時代を迎えている。子どもの管理の出来ない親御さんもいる。遅寝遅起きが習慣化し、生活の乱れに繋がっていかも知れないのである。加えて、吹き替えで流す外国映画の台詞の口汚さは耳を覆いたくなる。公共放送の良識はますます希薄となり、CMを財源にしている民放と大差がなくなった。その第一は、タレントやお笑い芸人を多用し、無理な笑いを誘っていることにある。笑いはエスプリやユーモアのようにその国の知性や民度を量るバロメーターでもある。いたずらに相手を揶揄したり、攻撃したりする言動は外国からも軽蔑の冷笑いを買ってしまうだろう。

ドラマには芸術的な主観要素が必要ではあるが、半分を占めると思われる偶然性の高い報道映像は、瞬間や限られた材料だから、視聴者を錯覚に陥し入れ兼ねない。一般人には体験することの出来ない、超高山や深海の様子は編集者と取材者の目でしかないのである。しかも、難コースに待ち構えて登山者を撮ったり、海底を撮影している撮影者を撮影している画面が頻繁に出てくる。つまりところ、テレビの画像は、視聴者が自分の目と見識で真実を作らなければならなくなったのである。真実を知る手段は、視聴者が演出家の立場で画面を観る以外に方策はない。

次に公共放送の出演者には、もう少しゆつくりと、はつきり、間違いのない言葉で話して欲しい。一部の若者に迎合して「チョウ」^チヨウの美味いは「超」を語源に発していると思われるが、美味さを超えた美味さはない）「アホ」、「キタネエ」、「うめえ」、「消えろ」、「やばい」とか「すげえ」、「凄いは（古語では恐ろしいの意が含まれている）を連発しないで欲しい。さらに、対談、鼎談^{ていだん}では政治家の討論ではないのだから、相手の物言いに自分の言葉を重ねないで欲しい。我々は聖徳太子ではないのである。聴き手には重層化した会話は雑音でしかなくなる。公共放送が美しい日本語を護る役目を果たしている役割は、大きいものがあることは言うまでもない。アナウンサーはそれなりの訓練を受けていると思われるが、少々人気が出ると民放に高額でスカウトされてしまう。さらに、お笑いや品のないタレント、職種不詳や国籍不明の外国人の起用には十分に配慮してほしい。日本には日本語を話せるアナウンサーは居なくなってしまったのであろうか、それとも東洋の日本人より欧米、中東系の顔立ちの珍しい姿が人目を惹くからなのであろうか。ここでは民族純化を訴えているわけでは決して無い。個々人の個性は大きく括れば国家の伝統が生み出した貴重な遺産である。世界の半数の女性

は、黒い瞳、黒髪、直毛に憧れていることを知るべきである。外国のファッションや皮相的な異国人の出演が続けば日本の若者は一部を除いて心ある視聴者は減少するだろう。これが公共放送の深謀遠慮ならば、大宅壮一はあの世で喜んでいるかも知れないが、事はそれほど単純ではない。話題は脱線したが、それだけテレビの影響は我々の身近なものになったということでもあろう。

ある夜のテレビ画面。大リーグのイチロー選手が二百本目のヒットを打った瞬間が報じられた。家内のたまは曰く「これもやらせ？」以後わが家では、画像の印象会話には規制がかかっている。有難くも、これが生活の揉め事もを少なくする妙手であると、この頃やっと気づいた次第である。

古人曰く「雄弁は銀にして、沈黙は金なり」しかし、言いたいことを腹に収めたまま無言のままこの世を去るのは、腹ふくるる思いも残る。